

「大阪・関西万博を歩く前に ― 見どころ・注意点・ホスピタリティの実像 ―」

大阪経済法科大学 経営学部

教授

酒井立夫

本講演では、翌日の視察に先立ち、会場の特徴と課題をホスピタリティの観点から検証する。大阪・関西万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに掲げ、未来社会の実験場として期待されている。しかし実際には、入場時の長蛇の列やパビリオン建設の遅れ、建設業者への未払い問題、さらには噴水等の水質汚染やメタンガスによるトイレ爆発など、多くの課題が表面化している。会場の夢洲は廃棄物処理場を埋め立てて造成された人工島であり、地盤やガスの安全性に不安が残されている。アクセス面でも、2024年8月に発生した地下鉄停電で帰宅困難者が出るなど、輸送インフラを含めたホスピタリティが問われている。一方で、日本国際博覧会協会は、給水所や冷却スペースの整備、デジタル予約システムの導入など、新しい取り組みを進めている。これにより、来場者体験の向上が期待されている。しかし、公式アプリの乱立や情報提供の不便さといった課題があり、十分に利用者に届いていないのが現状である。本講演では、会場を歩く動線の流れに沿って、「入口の混雑」「大屋根リングの安全性」「パビリオンの建設状況」「西ゲートの不便さ」などを具体的に取り上げ、来場者体験を形づくる要素として「待ち時間」「快適性」「安全性」「情報公開」を整理する。大阪・関西万博は未来を示す舞台であると同時に、ホスピタリティ課題の集積の場でもある。翌日の視察を通じて、光と影の両面を体感し、研究者の視点からホスピタリティの実像を捉える機会にしたい。

「生命輝く未来社会とホスピタリティ」というテーマから考える

ホスピタリティの本質について

大阪経済法科大学

ホスピタリティ論 担当講師

石井 里奈

「いのち輝く未来社会のデザイン（Designing Future Society for Our Lives）」というテーマは、人間一人一人が、自らの望む生き方を考え、それぞれの可能性を最大限に発揮できるようにするとともに、こうした生き方を支える持続可能な社会を創造していくことを推し進めるものとされている。関西万博の会場では、日本が世界に誇る様々な技術が発表さ

れ、160 を超える国や地域、国際機関が参加するなど国際交流や情報発信、未来を体感でできる様々なパビリオンやイベントに注目が集まっている。しかし、それら目に見えるものだけが今回の万博のレガシーとなる魅力だろうか。また、数字に表れている経済効果だけが成果なのだろうか。開幕前から様々な課題が指摘されてきた、関西万博がもたらしたものは何か、いのち輝く未来社会とはどのような社会なのか、ホスピタリティの本質という視点から考察する。